奄美大島のトン普通語と沖縄本島のウチナーヤマトゥグチの言語形式に見られる共通点と相違点

ダニエル・ロング

1.　はじめに

本稿では、奄美大島の若者の間で話されているトン普通語と沖縄本島の若者の間で話されているウチナーヤマトゥグチの共通点と相違点を探る。トン普通語は奄美の伝統方言ではなく、奄美方言（奄美語）を母語とする人々が標準日本語を第二言語として習得した際に生じた一種の中間言語と呼べる言語体系のことを指す。

奄美大島と沖縄本島のそれぞれで伝統的に使われていた言語（奄美語、沖縄語）は同じ琉球語系統の言語であり、その下位分類でも同じ北琉球系に分類される言語である。すなわちトン普通語とウチナーヤマトゥグチは同じ北琉球系のことばを基層言語とし、同じ標準日本語を上層言語としている。トン普通語とウチナーヤマトゥグチの両方の言語体系は接触言語（接触変種）であるが、同じ系統の起点言語を持つ。すなわち、両者の言語的ルーツは似ているので共通点が多いという予測が成り立つ。

トン普通語とウチナーヤマトゥグチは伝統方言と標準語との接触によって生じたという意味においてはネオ方言とも呼べる。しかし、大阪や福岡といった本土各地のネオ方言とは大きく異なる点がある。本土のネオ方言は「伝統方言が標準語の影響を受けて変化した」と言える。というより、これが「ネオ方言」の定義そのものである。よって、大阪のネオ方言は関西方言の一種であり、福岡のネオ方言は九州方言の一種と言える。それに対してトン普通語とウチナーヤマトゥグチは上で述べたように、琉球語を母語とする人々が標準日本語を第二言語として習得しようとした時に形成された中間言語である。伝統的な沖縄語や奄美語よりも、はるかに標準語の方に近い。言語体系としては琉球語の一種ではなく、ある意味では関東方言の一種として位置付けられるべきである。別の言い方をすると、もし伝統的な沖縄語しか話せない人がいたら（現在そういう人はたぶん存在しないが、仮にいたとしたら）その人はウチナーヤマトゥグチは理解できないだろう。しかし、標準語しか分からない人が（実はそこまで厳密に言わなくても、「全国共通語しかしゃべれない人」でも良いが）沖縄や奄美へ行ったら、さほど困難なくそれぞれの地域のトン普通語やウチナーヤマトゥグチを理解することはできる。本土各地で指摘されている「ネオ方言」は基層言語（伝統方言）との相互理解度が高いが、琉球語地域のこの２つの接触変種はむしろ上層言語（標準語）との相互理解がある。

本稿で取り上げるデータは、筆者が 2009 年 7 月に行なった面接調査のデータである。被調査者は奄美大島出身の４人だった。当時は琉球大学の２年生だったので一年以上沖縄本島で暮らしていた。インフォーマント（出身地、性別、頭文字）は、名瀬出身の男性Ｎ氏、名瀬出身の女性Ｆ氏、笠利出身の男性Ｈ氏、古仁屋出身の男性Ｔ

氏である。N と F の調査は同時に行なったが、これは調査に悪影響を与えた様子はなかった。つまり、相手の回答に引きずられたというより、相手とのことばの捉えかたの違いに刺激を受けてなおさら詳しい情報を提供してくれたという印象すら受けた。

伝統方言において北部の名瀬・笠利と南部の古仁屋は違いを見せているが、若者の使用言語においてはさほど変わらないというのは研究者一般の見解でもあり、４人のインフォーマントの意識でもあった。それでも本稿で４人の回答が異なる時にそれに触れる。面接調査項目は筆者が選んだものである。その際参考としたのは倉井則雄(1987)の『トン普通語の処方箋』のほか、筆者が 2004 年 11 月に大島支庁にて奄美大島出身の 50 歳代男性話者（M 氏）を対象にした聞き取り調査結果であった。調査者が尋ねたのは七十数項目だったが、被調査者は全員積極的に奄美と沖縄の両方における使用状況や意味、発音、使い方などの詳細について教えてくれたため、それぞれの調査は２時間程度かかった。

2.　方言語彙

ウチナーヤマトゥグチとトン普通語は沖縄本島と奄美大島のそれぞれの若者が使う２つの言語体系である（中高年が使う場合もあるが、本稿で問題にしているのは若年層の使用である）。これらの言語体系には様々な起源をもつ言語事象（語彙、文法項目）がある。起源による仮の分類を試みる。まず、（1）「伝統方言と同形語」のものがある。これらは語形が伝統方言に由来するものである。例えば奄美の若者はアバスという魚名を使う（標準語：ハリセンボン）。これは伝統方言の単語だが、伝統方言が使えない若者も使っているので、正確には「伝統方言に由来するトン普通語の単語」と分類すべきものである。この「伝統方言と同形語」の下位分類として、（1a）意味が変化していないものと（１ｂ）意味が変化したものの２種類が挙げられる。後者は例えば、ウチナーヤマトゥグチの程度副詞「でーじ」である。「でーじ暑い」は「とても暑い」の意味である。語形そのものは伝統方言に由来するが、意味がそれから変化してきている。伝統では「とても」という意味ではなく「でーじやっさ！」（大変だよ！）のように使われていた。しかし、標準語で「大変暑い」という使い方ができるように、ウチナーヤマトゥグチでは「でーじ暑い」という表現が使えるようになった。次に（2）「標準語と同形だが、意味が異なる」ものが挙げられる。これは上記のような下位分類がない。当然、形式と意味の両方が標準語と同等であれば、それは標準語そのものになるからである。

ここで琉球系統の言語である沖縄語（沖縄方言）と奄美語（奄美方言）に共通するいわゆる方言語彙を見よう。

上で触れたハリセンボン（魚名）を意味するアバス（沖縄：アバサー）は４人共使うと答えた。この単語は標準語にも置き換えられていないし、「琉球共通語」とも言える沖縄本島の語形にも置き換えられていない。トン普通語の普及によって、奄美の伝統方言の文法規則が忘れられて、その発音体系が消えてしまっているのは事実だが、こうした個別単語の形で、伝統的な奄美語が現在のトン普通語に（部分的に）生き残

っていると言える。

沖縄の若年層の間で生産的に見られる指小辞「グヮ」（酒グヮ、ドゥシグヮなど）は奄美では廃れているようである。奄美語は有声化しないクヮがあるが、今回の若年層話者は「鳥ックヮ」といった例を挙げながら「年配者の言い方」と説明している。

驚きを表す奄美の「ハゲー」は沖縄で「アゲー」と言う。倉井(1987: 124)はこれを女性語と述べており、沖縄においてアゲーも女性ことばだという人がいる。今回の奄美のインフォーマントは男女共に「ハゲー」も「アゲー」の両形を使うと答えた。が、若者が「ハゲー」も「アゲー」も使うのに対して奄美の年配者は「ハゲー」のみと答えている。本来沖縄のことばだったアゲーが奄美に入り込みつつあるのだろうか。

「イギー」を倉井が「気持ちが悪い」と訳している(同上 126)が、奄美の中年男性はイギーを「わじわじしたり、いらいらしたりするときに使う表現」と説明している。沖縄の若年層が頻繁に使う「わじわじする」（いらいらする）は島北部の 3 人が使うようだが、T は古仁屋で使われないと答えた。

沖縄で「穴を開ける・穴が開く」を「穴をほがす・穴がほげる」と言う。名瀬出身の F と N はこれが使われると答えたが、笠利の H と古仁屋の T は使われていないと言った。「怪我する」を意味する「手をいたます」についてもまったく同じ回答パターンが見られた。しかし、同じ意味の「手をやます」は、F は使うと答えたが、N と H は、これは中年層以上のことばだと答えた。T もこの表現は「若者は少し使う」という使用状況に関する情報をくれたほか、「あの人はやましている」という使用例を挙げて、しかも外傷よりも病気の場合に使われるという情報を提供してくれた。「いたます」や「やます」は標準語の「痛む」と「病める」と関係しているのは間違いないが、これらの語形は現代の標準語で使われることはない点から本稿では方言語彙に分類した。

沖縄で使われている新しい方言は奄美には伝わっていない場合がある。例えば、沖縄で使われている「自動車教習所」を意味する「自練」は４人共使わないと答えた。４人のコメントは次の通りである。F : 奄美のおじさんは「自練」を使うが、今は「車校」。N :「違和感がないが、自分は「車校」を使う。奄美では中年からも「自練」を聞いたことがない。H : 沖縄で「自練」を聞いてびっくりした。自分は「車校」。奄美の中にも地域差があるようで、北部の３人が答えた「車校」に対して、古仁屋の T は「自校」を使うと答えた。

奄美出身の 4 人の意見が分かれる項目があった。ウチナーヤマトゥグチで、「当たっている」を「合っている」の意味で使う。問えば、「この伝票に書かれている数字はあたたっていると思います」などと言う。そして、「むちゃむちゃする」ということばは「べたべたしている、ねちゃっとしている」という意味で使われる。「当たっている」は使わないと F も T も言ったが、N は自分は使わないけど、聞けばそれほど違和感を感じないと答えた。笠利出身の H はこれを使う。そして、「むちゃむちゃしている」に関しても使うと答えたのは H のみである。なお、こうした調査の場合に心配されるのは、インフォーマントが調査に引きずられて、実際に使わないのに、「使う」と答えてしまうということである。しかし、今回そうした心配は要らないようである。とい

うのは、Hは「何気なく」答えたのではなく、深く考えて、意味領域の詳細に関する補足までしてくれた。それはすなわち、「『むちゃむちゃしている』は、『べたべたしている』の意味ではあるが、べたべたした人間関係のような場合には使えない」というコメントであった。

沖縄の若い人の間で「ならん」（だめ）という表現はよく使われている。語源的には「成る」の否定形だが、標準語に「ならん」という語形がないので、本稿で方言語彙として取り上げる。奄美の４人は使わないと答えた。Tはこの意味で使われる表現として「いかん！」を挙げたが、これは琉球語地域の独特な言い方というよりは西日本共通語の言い方であろう。同様に、沖縄で若い人が標準語のつもりで使う「あらん」（違うよ！）という言い方がある。笠利のHは「あらんどぉ！」という形で使うと答えたが、他の３人は「使うならば、伝統方言の中でお年寄りが使うだろう」のように判断したのである。

3.　語形が標準語と同様で意味の異なる語彙

以上では語形自体が標準語にない方言語彙を見たが、次には語形が標準語と一致するものの、意味が異なるものを見よう。例えば、沖縄では「（タオルなどを）交換する」という意味で「交代する」と言う。今回のインフォーマントは４人ともこれを普通に使うと答えた。

「すばらしい、良い」を意味する「上等」に関して３人は使用すると答えたが、Hは「お年寄り」の表現と判断した上、自分の世代は「いいやぁ」を使うと答えた。今回の調査項目にはこのような標準語と同形のものが数項目入っていたが、いずれも北部の３人は使うと答えたのに対して古仁屋出身のTは使わないと言った。ちなみに、Tの父母も古仁屋の生まれ育ちだが、祖父は商売を始めるために四国からやって来たと言う。筆者が奄美で感じたのは同じ高年話者でも北部は標準語が苦手（訛りがあるなど）だが、古仁屋は地方のお年寄りと思えないぐらい標準語がうまいということである。本人たちに言わせると、日露戦争から古仁屋にはよそ者が集って来ており、方言の分からない人が地域社会で大勢暮らしていた。そのため、古仁屋の人にとって、標準語というのは学校で覚えるだけの言語ではなく、日常生活で使う言語だったと言う。今回の調査でも、都市の名瀬を含む北部は古仁屋よりも方言を使っている印象を受けた。

次に奄美北部の３人は使うと答えたが、Tは使わない３項目を見よう。まず、標準語の「味見する」を意味する「味する」は例えば「これおいしいかどうか分からんから味して」のように使われる。また、「着る」を意味する「つける」は例えば「私はいつも１３号サイズをつけている」のように使う。そして、「ずるい」を意味する「いんちき」は「父さん、妹だけにお菓子あげるなんていんちきさー」のように使用されるのである。

沖縄では「にーにー（お兄さん）は本島の高校をあるいている」のように、習慣として行なっている行為に「あるく」という語を使う。元々は（漁師などのように）「海

で生計を立てる」時に使われていた。そこから「車で歩いている」（交通機関を利用するのではなく、自動車を使った生活を送っている）という意味まで広がり、現在は社会人ではなく、このように学生について使われる。「高校あるいている」を使うと答えたのは、F 氏である。N 氏と H 氏は２人とも、自分は使わないが中高年の人なら使うと答えた。しかも、H は「海を歩いている」という本来の表現は地元で使われないと言った。T は古仁屋では聞いたことがないと答えている。なお、この「歩く」の使役形も沖縄にあり、「運転する」は「車を歩かせる」とも言う。今回の調査で 4 人ともこれを使わないと答えている。

琉球語地域でゴミのことを「チリ」と言う。西日本各地において「ちりばこ」という言い方が広く使用されているが、沖縄などで「燃えないチリの日」や「町はずれにあるチリ捨て場」のように標準語と異なる使い方も見られる。奄美で筆者がゴミ用のポリバケツの横に手書きで「燃えない塵」と書かれているのは見たことがあるので、奄美で使われていることは分かっている。それどころか鹿児島市でも普通に使われている。しかし、少なくても今回の奄美若年層インフォーマント３人にとって使用語彙ではないようである。４人目の H でも「『チリ捨て場』や『チリ捨て箱』なら使うが、『燃えるチリ・燃えないチリ』は抵抗ある」と答えた。

標準語と同形の方言の場合、当該地域の話者はそれが方言だと気づかない場合がある（ロング 1993）。今回の調査で注目したのはこれらの使用や認識であり、特に標準語だと思っているかどうかという意識について尋ねていなかったが、インフォーマントは「方言調査なのになぜこの表現について尋ねているのか」という反応を示した。このことから、インフォーマントにとってこれらは「疑似標準語」に当たると言えそうである。「疑似標準語」と「ある地域の話者は標準語だと思い込んでいるが、実際には全国で標準語として通用しない言語事象」である。ウチナーヤマトゥグチおよびトン普通語と分類される言語事象にはこのように標準語だと地元が思っているものもあれば、地元の人がそこでしか通じないと分かっているものもある。今後「言語意識調査」または「場面による使い分け調査」によって、ウチナーヤマトゥグチおよびトン普通語の疑似標準語の部分とそうではない部分をはっきりさせる必要がある。

これまで見て来たように被調査者の答えに違いが見られた項目もあったが、４人とも「使わないし、奄美で聞かない」と答えたウチナーヤマトゥグチの項目は、「花園係り」（花壇係り）、「コンサート会場はいっぱいしていた」（込んでいた）、「コンパは 2000 円出る」（2000 円かかる）、「靴がせまい」（きつい）、「自練」（自動車教習所）の四つである。

4.　文法事項

ウチナーヤマトゥグチと共通して使われるトン普通語には次のようなものがあった。まず、文法事項を見よう。動詞の過去否定形＜～んかった＞は、４人共使うと答えたが、H が例として「来るっち思ったんば、来んかったどー」と話した。一段動詞の否

定形には五段化現象が見られる。4人共、「起きる」の否定形には「オキラン」も「オキン」も両方使うと答えたが、意味の違いや使い分けは特に意識していないと言う。九州の一部（宮崎など）ではこうした一段動詞の否定形の五段化は最も短い動詞（語幹が一拍である出る、見る、着るなど）に限られるが、この制約は奄美の動詞にはないようである。

奄美や沖縄は、九州など（近畿を除いた）西日本各地と同様、状況可能と能力可能を区別している。沖縄のウチナーヤマトゥグチで一般に使われる能力可能は例えば、「英語話しきれん」である。これは九州の「話しきらん」に由来するが、いわば二重否定になっている。奄美の４人の若年層インフォーマントは主に「あんな難しい字は書ききれん」（能力可能）と「ペンはインキがなくなって書かれん」（状況可能）のように使い分けていると答えた。九州のように能力可能に「～きらん」も聞くと答えているが、沖縄と同様「～きれん」が優勢である。

ウチナーヤマトゥグチで良く話題となる＜受身＋ている＞は奄美でも使われる。同じ状況でも「飾ってある」より「部屋に花が飾られている」は自然に聞こえるという回答を得た。

ウチナーヤマトゥグチのモダリティ表現「ハズ」（だろう）と「ワケ」（の）がよく取り上げられるが、奄美でも使われるようである。今回の４人は両方を使うが、名詞の場合は「だ」も「な」も若年層には不要になってきているようである。インフォーマントＦとＮの２人は「あの人、先生だはず」（先生だろう）と「そうなわけ？」（そうなの？）を使うと答えた。Ｈは「だはず」以外に「先生はず」も使う。そして、「わけ」に関しても「そうだわけ」、「そうなわけ」、「そうわけ」を３つとも許容していた。一方、古仁屋出身のＴは「ダハズはおかしい、先生ハズしか言わない」と答えた上、「わけ」に関しても「だ」が入るのがおかしいと判断し、「そうなわけ」か「そうわけ？」しか使わないと言った。

話者が自分一人の行動に関して使う意思表現「しましょう」は沖縄の代表的な言い方である。筆者がこれまで数回奄美を訪れたときにこの表現は気にならなかったので、沖縄ほど使われていないかと思ったが、今回の奄美の４人は普通に使うと答えた。

ウチナーヤマトゥグチでは「名詞＋する」の形式が頻繁に使われるが、奄美の若者は「雑巾する」や「箒（ほうき）する」を使わないようである。今回の調査で最も方言を使っている（あるいは知っている）笠利出身のＨだけはこれらの表現を認めた。なお、沖縄でよく聞かれる「コンサート会場はいっぱいしている」（込み合っている）という表現は今回の奄美の若者は（沖縄に来てから耳にするものの）奄美では聞かなかったと言う。

沖縄でよく聞く時間の「前後」と関わる表現は奄美の若者には人気がないようである。「三時あとに来てください」（３時すぎ）はＨが「年配者に多い」と答えたのみで４人とも不使用とのことである。「お昼あと」（お昼すぎ）も２人しか使用しない。一方、「授業あと」（授業のあと、授業後）になると、４人のうち３人が使うと答えた。

時間と空間の両方の場合に使われる「否定＋前」（例：5時にならない前に、役場行かない前に右に曲がる）は4人とも知らないようである。

ウチナーヤマトゥグチには興味深い疑似標準語の文法事項がある。「お前殺されるど！」や「ガムもらう？」という表現は一見関係がないように見えるが、その背景にある原理は同じである。「お前殺されるど！」を東京で言えば、聞き手は第3者に殺されると解釈するが、沖縄では話し手が聞き手を脅かすときに使う表現である。つまり、標準語の受身表現の場合（「だれそれに」のニ格に当たる）動作主は一人称で有り得ないが、ウチナーヤマトゥグチにはこうした制約がなく、「（俺に）殺されるぞ！」という文は成立する。沖縄で言う「ガムもらう？」も同様、「第三者に」ではなく「私に」という解釈が充分あり得る（というよりも、一般的な理解であるようだ）。言い換えれば、標準語の授受表現（「だれそれに」のニ格に当たる）与え手は一人称では有り得ないが、沖縄ではこうした制約がない。今回の調査では、「殺されるどやぁ！」や「打たれるどぉ！」のような受身や、「ガムもらう？」のような授受表現を使うと答えたのは奄美北部の3人で、古仁屋のTは使わないと答えたのである。なお、これらの用法は方言と意識されないいわゆる「疑似標準語」である。

ヨル・トルの使用には個人差が見られる。九州ではこれらはアスペクトを表すもので、ヨルは進行態（子供は外で遊びよる）であり、トルは結果態（財布が落ちとる）。九州のヨルは単なるアスペクトであるので、現在形の「ヨル」（～ている）もあれば「ヨッタ」（～ていた）という過去形もある。しかし、沖縄や奄美のヨッタは違う。経験相と言われる文法事項であり、（1）自分で見たり聞いたりしたことに限る（歴史的なできごとには使えない）、（2）見たり聞いたりした出来事に限るから一人称で使うのは有り得ない、（3）現在形のヨルは普通に出ない、という3つの特徴を持っている。

今回の調査で、ヨッタに関する4人の答えがバラバラだったので奄美の若年層におけるヨッタの使用については判断しにくい。まず、Tは「よった」という表現自体は古仁屋にはないと言った。名瀬出身のNも沖縄に来てから聞くようになったと語っている。一方、名瀬出身のFは「ヨッタ」という表現を持っているものの、経験相かどうかは曖昧である。彼ははっきりと「他人がやっている動詞にしか使えない」と答えたので、経験相だと思ったが、「見ていないことでも『よった』が使える」という内省もしているし、「現在形でも使う」と語っている。この2つの情報は経験相という解釈と合わない。一方、Hは逆に一人称のときにも「ヨッタ」が使えると内省しているから、なおさら判定が難しいのである。

アスペクトのトルを「財布落ちとるよ」のように使えるかという問いに対して、Fだけが「使う」と答えた。ほかの3人は「落ちてる」のみ使うと答えた。しかも、これは標準語かというと、そうではないようである。なぜなら、Hは「財布おちてるでゃぁ」という方言の文末詞の付いた例文を作ってくれたからである。

ウチナーヤマトゥグチでは否定疑問文に対する応答の仕方が標準語と異なる。例として次の標準語のやり取りを考えてみる。

A：宿題やっていないよね。

B：うん、やっていないよ（肯定の場合は「ううん。やっているよ。」）

標準語では、返事の応答詞の肯定・否定は、質問文の肯否によって決まる。一方、ウチナーヤマトゥグチにおいて、質問文の肯否と無関係に、返事は否定的な場合は「いいえ・ううん」を使い、返事は肯定的な場合は「はい・うん」を使う。よって、以下の会話になる。

A：宿題やっていないよね。

B：ううん、やっていないよ。（肯定の場合は「うん。やっているよ。」）

4人のインフォーマントのうち、Nだけはこうした応答パターンを使うと答えた。

さて、沖縄では、「～ましょうね」という表現をよく耳にする。標準語でも「俺、止めようかな」のように、勧誘形が意思表現として使われることがあるが、沖縄の「～ましょうね」は標準語の同形の表現に比べて勧誘ではなく、一人だけの意思を現わす場合が多い。例えば、筆者は沖縄のファーストフード店員に言われたのは「出来上がりましたら、テーブルまでお持ちしましょうね」だった。この使い方の背景には伝統方言の言語干渉があるようである。伝統方言では、「さびら」は標準語の「します」にも「しましょう」にも相当する表現である（比嘉光龍、私信2009）。例えば、「お願いします」は「うにげーさびら」と言う。一方、「ゆんたくさびら」は「語り合いましょう」と言う。今回の4人のインフォーマントのうち、この沖縄的な「～ましょう」は地元で使われていないと答えたのは、名瀬のFとNである。笠利のHは、文末詞の「ね」は使っていなかったが、地元でも「貸してください」のことを「借りおうやぁ」と言っていたと答えた。そのためか、沖縄に来てから、沖縄的な「～ましょうね」に対する違和感がなく、それを自然に受容したと語った。古仁屋のTは沖縄的な「～ましょうね」は地元で使われていると答えた。

これと同じ回答パターンが見られる別の文法事項があった。沖縄で「やらんどこうね」（または「やらんとこうね」）という表現がある。直訳すると「やらないでおこう」という否定的な勧誘形になるが、東京ならむしろ「やめよう」のような反対語の肯定的勧誘形が自然であろう。濁らない「やらんとこ」は西日本で広く分布している。北部のFとNとHは濁る沖縄の形を使わないと答えたが、南部のTは「やらんどこ」と「やらんでおこう」の両方が地元で使われていると語った。

また似たような表現が沖縄にある。「今日は雨降ってるから学校いかんこーやっさ」のように、「ど」や「と」が入らない形がある。これについて4人とも使わないと答えた。

沖縄的な文末詞は奄美で使われていないようである。例えば、「昨日、台風来たばーよ」（来たんだよ）や「何回も言っているやし！」、「おいしいさー」のように「ばーよ」、「やし」、「さー」は4人共使わないと答えた。

沖縄では使役の使い方が標準語と異なることがある。「携帯番号ならわして」のように「教える」という意味で「ならさす」（習わせて）という言い方が使われる。奄美の4人は皆これが使えないと答えた。彼らは「ピアノ習わしている」や「しゃみせん習わさせようかな」のような言い方ならすると答えたが、これらの言い方は（「さ」入れ

ことばになっていることを別として）標準語の使い方に類似するので、沖縄の言い方と異なると判断すべきである。

琉球語の伝統方言において、所有関係を現わす「ぬ」（標準語の「の」に当たる）は一般名の後に付くが、代名詞や固有名詞の後では使われない。したがって、「太郎の本」は「太郎本」となる。このように、「ぬ」を挟まないことを「ゼロ形式」とも言う。奄美の４人はこのようゼロ形式の言い方は固有名詞の場合にしないと答えた。なお、伝統方言の代名詞の後ならゼロ形式の言い方をすると答えたが、これは生産的なルールというよりは、いくつかの決まり文句的な言い方の場合に表れる特徴である。例として全員は似たような言い方、すなわち「わきゃ島」（F、N、H）や「わきゃー島」（F、N、T）を挙げていた。

なお、「文法」事項というべきか、構文（統語素）ではなく語形成と関わる形態論的な特徴も調査項目にあった。沖縄の若年層話者は「ピンク色の」という意味で＜ピンクい＞を使う。奄美のインフォーマントは４人共これを使うと答えた。これはもちろん色彩語彙の和語形容詞（黒い、白い、赤い、青い）への連想によって生じた語形であるが、奄美のインフォーマントはこの「外来語＋い」の使用に制限があることを指摘している。１つは、この語尾の生産性ではなく、「ピンク」という語に限る点、つまり、「ベージュい」や「シアンい」、「モーブい」と言えるわけではない。もう１つは、この語尾は基本形と言える連体形・終止形に限り、「ピンクかった」、「ピンクければ」、「ピンクくない」などと活用できるわけではないという点である。

同じような形態論的なものとして挙げられるのは「腐る」を意味する「腐れる」である。これを例えば、「ハブに噛まれると筋肉が腐れる」のように使う。この言い方は古仁屋のＴを除いて、インフォーマントの３人が使うと答えた。興味深いことに、Ｔが「畜生！」という感じで「腐れぇ！」を使うと言ったが、これは「腐る」の命令形に由来すると思われる。

5.　おわりに

今回の調査はウチナーヤマトゥグチとトン普通語との違いを探るものとは言え、一方的な確認しかしていない。それはつまり奄美の人にウチナーヤマトゥグチの言い方を挙げて、それを地元で使っていたかどうかを確かめただけである。反対に、これまで奄美のトン普通語の例として文献に出て来た表現を使うかどうかのチェックはしていない。それを確認するためには沖縄出身のインフォーマントの調査が必要である。しかし、「トン普通語にあってウチナーヤマトゥグチで使われない」言い方の有力候補がいくつかこれまでの参与観察から浮かび上がっている。例えば、奄美で「（意味が）通じる」という意味で「うつる」を使い、「意味がうつらんままでしゃべり続けた」のように言う。これまで数人に確認して、沖縄本島で通じないとの回答を得ている。今回の４人の奄美出身者を対象にした調査でも自由回答としてこうした情報を少し得ている。例えば、沖縄で使って通じなかった例として「しまいっちば！」を挙げていた。「しまい」は標準語の書き言葉にもある推量表現の否定形で、「っち」は奄美の典型的

な引用表現（標準語の「って」に当たる）である。ただし、奄美のインフォーマントはこれがむしろ標準語の「しないといけないよ」に相当すると言っている。沖縄の人が分からなかった。もう１つの「沖縄で使って通じなった」例として「あふぁじらー」を挙げた。これを「気まずい」や「場違い」の言動と説明している。今後、ウチナーヤマトゥグチとトン普通語との違いをこのように、奄美側からも検証する必要があろう。

参考文献

有元 光彦(1997)『奄美方言の規則動詞活用形における方言差の研究』（科学研究費成果報告書）

上村 幸雄 研究代表（1990)『奄美諸島方言の言語地理学的研究』（科学研究費補助金総合研究Ａ研究成果報告書）

大城朋子、尚真貴子（2007）「日本語バイリンガルへのパスポート」沖縄国際大学日本語教育教材開発研究会

大野眞男（1995）「中間言語としてのウチナーヤマトゥグチ」『言語』24-12

狩俣繁久（2002)「琉球の方言」『朝倉日本語講座１０方言』朝倉書店

かりまたしげひさ (2006)「沖縄若者ことば事情 ―琉球・クレオール日本語試論」『日本語学』25：50-59

かりまたしげひさ(2008)「トン普通語・ウチナーヤマトゥグチはクレオールか ―」『南島文化』30: 55-65,（沖縄国際大学）

北村 力馬（1927, 1975）『奄美大島語案内』国書刊行会

木部 暢子(1995)「方言から『からいも普通語』へ」『言語』別冊『変容する日本の方言』

倉井 則雄(1987)『トン普通語処方箋 シマの標準語をすっきりさせる方法』名瀬市自家版

倉井 則雄(1998)『奄美方言(シマグチ)語源散策、シマグチと民俗おもしろ漫筆』自家版

真田 信治 2006『薩南諸島におけるネオ方言（中間方言）の実態調査 「奄美」』研究成果報告書

真田 信治(2006)『奄美大島における言語意識調査報告書』大阪大学大学院文学研究科日本語学講座逐次刊行物

柴田 武(1984)『奄美大島のことば―分布から歴史へ』秋山書店

新屋敷 幸繁（1936)『奄美大島方言と土俗 第１冊:研究總論と名詞編』（出版者不詳）

高江洲頼子(2004)「ウチナーヤマトゥグチ ―動詞のアスペクト・テンス・ムード―」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房

高江洲頼子(1994)「ウチナーヤマトゥグチ ―その音声、文法、語彙について―」『那覇の方言』沖縄言語研究センター研究報告書３

中井精一、東和明、ダニエル・ロング編(2009)『南大東島の人と自然』南方新社

永田 高志(1996)『琉球で生まれた共通語　地域語の生態シリーズ琉球編』おうふう
仲間 恵子(2005)「鹿児島県大島郡与論町麦屋方言」『方言における述語構造の類型論的研究』平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 B1 研究成果報告書、工藤真由美研究代表
比嘉光龍（2009）5 月 26 日の私信（うちなぁやまとぅぐちの定義に関する A420 頁におよぶメモ）
平山 輝男（1986)『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店
藤木 勇人(2004)『ハイサイ！沖縄言葉』双葉社
松本 泰丈(1996)「奄美大島方言のメノマエ性ー龍郷町瀬留ー」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題』ひつじ書房
松本 泰丈(1999)「旧連用形をパラダイムにどうおさめるかー奄美ー沖縄方言の動詞の連用形ー」春日正三先生古稀記念論文集刊行会『ことばと文学と書』双文社
三石 泰子(1993)『名瀬市の方言』秋山書店
屋嘉比 凉子(2005)「沖縄県島尻郡東風平町ウチナーヤマトゥグチ」 『方言における述語構造の類型論的研究』平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書、工藤真由美研究代表
山田 実（1981）『奄美与論方言の体言の語法』第一書房
ロング、ダニエル(1993)「疑似標準語と地方共通語」『大阪樟蔭女子大学論集』 30: 1-10 大阪樟蔭女子大学
ロング、ダニエル(2010)「奄美ことばの言語景観」『東アジア内海の環境と文化』（内山純蔵、中井精一、中村大編、日本海総合研究プロジェクト報告５）174-200 桂書房
ロング、ダニエル(2010)「言語接触から見たウチナーヤマトゥグチの分類」『人文学報』 428: 1-30

(Daniel Long・首都大学東京教授)